

本学会，学会誌，サルコイドーシス／肉芽腫性疾患国際会議

名誉会員 立花暉夫

私は本学会関連では1981年第1回サルコイドーシス研究会，1969年サルコイドーシス国際会議以来毎回，演題発表し，討論に参加し，1999年以来本学会出版物編集に関与してきたので，今回，関連事項について述べる。

本学会は，1981年サルコイドーシス研究会創設以来，1988年日本サルコイドーシス学会，1999年日本サルコイドーシス／肉芽腫性疾患学会として，本年は1981年以来26回目の総会が開催される。

学会誌は1981年サルコイドーシス研究会誌Vol 1，1998年日本サルコイドーシス学会雑誌Vol 8，1999年日本サルコイドーシス／肉芽腫性疾患学会雑誌，サルコイドーシス／肉芽腫性疾患（2000年以後略称：日サ会誌）Vol 19として発行した。1998年までは総会発表内容のみ，頁数の多い特別講演，特別報告と一般演題各2頁で，1999年は総説，症例報告，2000年以後は総説，原著，症例報告の形式，本年は千葉保之・本間日臣記念賞受賞者論文，コラムなども含むものとし，その他の内容として，1998年以後毎年の本学会支部会演題，Baughman, Sharma特別講演，ATS/ERS/WASOGによるStatement on Sarcoidosisの翻訳，サルコイドーシス治療に関する見解—2003，サルコイドーシスの診断基準—2006などを掲載した。さらに2000年以後，抄録記載の総会号は毎年No 2あるいはサプリメント号で発行。本学会誌の基礎的，臨床的内容は，下記単行本と共に，サルコイドーシス／肉芽腫性疾患研究者にとって，また診療の際にも重要である。

学会誌以外の出版で，1993年の「日本サルコイドーシス学会編集：最近のサルコイドーシス，臨床各科の症例を中心として」は肺，肺外病変の解説，代表例提示，その他豊富な内容で，2006年は「日本サルコイドーシス／肉芽腫性疾患学会編集：サルコイドーシスとその他の肉芽腫性疾患」を出版した。

サルコイドーシス関連国際会議で日本の研究者多数の研究発表，討論参加が目立ったのは1969年Prague，1972年東京開催International Conference on Sarcoidosis，1979年奈良International Symposium on

Sarcoidosisからである。以後，Sarcoidosis以外の肉芽腫性疾患を含め，1975年New York，1978年Cardiff，1981年Paris，1984年Baltimore，1987年Milano，1989年Lisbon，1991年京都，1993年Los Angeles，1995年London，1997年Essen，1999年熊本，2001年Venice，2002年Stockholm，2005年Denverで開催の国際会議その他。会議名称は，International Conference on Sarcoidosis and Other Granulomatous Disorders，World Congress on Sarcoidosis and Other Granulomatous Disorders，WASOG（World Association of Sarcoidosis and Other Granulomatous Disorders）Congress，WASOG MeetingやWASOG主催International Conference on Diffuse Lung Diseases（第1回2001年Venice，特発性肺線維症，肺胞蛋白症，肺胞微石症も含み来年東京開催予定）など。日本のすぐれた各個研究，基礎的，臨床的協同研究が目立ち，日本を含む多くの国の多施設共同研究，各国で特色ある研究，米国多施設共同研究ACCESSなどが発表されている。

WASOG Official Journal は1984年Sarcoidosis Vol 1，No 1が最初で，1996年Sarcoidosis Vasculitis and Diffuse Lung Diseases Vol 13，No 1，2005年はVol 22，No 3発行。日本人研究者の投稿を含み，サルコイドーシスの基礎的研究，肺病変，肺外病変，その他の臨床的研究やサルコイドーシス以外の肉芽腫性疾患の研究業績を掲載している。1989年以後，WASOG主催国際会議抄録記載特別号も発行，1991年京都開催分は1992年，1993年Los Angeles開催分は1994年に全演題full text掲載。1969，1972，1975，1978，1981，1984，1987年の国際会議記録は開催国からfull text記載で単行本としてProceedingを発行した。Tokyo Univ Press1974，1981年，Ann NY Acad Sci 1976年Vol 278（1975年開催分），1986年Vol 465（1985年開催分）は代表的である。上記はすべて，文献として引用されている。

今後，上記先輩の活躍に負けぬように，若い研究者の国際的に評価される本学会，国際会議発表，論文投稿を心から期待します。